第1回 SPARC Japan セミナー2015「学術情報のあり方 —人社系の研究評価を中心に—」

ディスカッション

駒井　章治　（奈良先端科学技術大学院大学）
中尾　央　（山口大学国際総合科学部）
野村　康　（名古屋大学環境学研究科）
永崎　研宣　（人文情報学研究所）
中村　征樹　（大阪大学全学教育推進機構）
佐藤　郁哉　（一橋大学商学研究科）
竹内　比呂也　（千葉大学）

●**駒井**　今まで、多様な評価があるべきだろう、あるいは、もうなくなってしまってもいいのではないかなど、いろいろな話がありました。私は別件で、「科学技術の国際展開（科学技術イノベーションの戦略的国際展開に向けた検討会）」に参加している経緯があり、そういう視点で今日の話を見ると、国内で閉じている状態ではないということを考えないといけないと思いました。黒船はもうそこまで来ていて、もしかすると教員のポジションも外国の方々に攻めてこられる可能性があります。

佐藤先生からお話しいただきましたが、いろいろな形で極めてがしがしに評価されている教員が押し寄せてきたときに、われわれは「僕たちは評価しないからいいんだよ」という形で対抗できないのです。横に並んでしまうと、評価が高い方を選んでしまうのは仕方がないことです。自衛的な意味も含めて、何がしかの評価の手段を取っておかないといけないのではないかと私自身は考えています。

そういう意味で、ただ手放しに勝手に好きなことをやっていればいいというのは、ちょっと違うのではないかなと思うのですが、そういう視点からもご議論いただければと思います。佐藤先生、いかがですか。

●**佐藤**　大賛成です。数日前に苅谷剛彦さんが日経新聞に、スーパーグローバル大学の「外国人教員等」の話を書いていました。これから外国人教員等が外国籍の教員になるのなら、若い人たちのジョブが奪われるというのは、確かに駒井先生がおっしゃるような一つの懸念です。でも、それは学問水準を上げることと、学生たちの教育にとっていいことなのかもしれません。インテリジェンスの高いネイティブが教えてくれることによって、教育サービス、研究の中身も良くなればと思います。

大相撲でもラグビーでも外国人がいますが、それはアメリカなどでは普通です。しかし、多様性からすれば、われわれの大先輩たちが築き上げてきた日本固有のものが失われるのは防衛しなければいけないでしょう。

また、外国語に翻訳されていれば評価され得るものが見過ごされている可能性もあります。それはアメリカでもイギリスでも同じです。「Times Higher Education」にも、昨日そのような記事が載っていました。

それから、「Academy of Management Journal」という世界に冠たる経営学系のジャーナルの中に、全く同じようなことが書いてあります。フランスでインパクトファクター、サイテーションしていたものが、フランス人の書いたものは英語は 30 しかありませんが、フランス語まで含めると 500 あります。これはどちらが偉いのか、全く同じことが日本で言えます。

また、経済学の対象は日本にも関係するので、英語

で出すことで本当のオーディエンスに届かないことがあります。世界の中におけるランキングを上げることを目指すのは仕方がないですが、政治家が国際会議で「うちはランキングが上がった」と言うために一億総活躍しても仕方がないと思うのです。もう一つ違った角度から、誰がクライアントか、誰が受益者であるのか、誰がハッピーになれるのかということをわれわれは考えなければならないのではないかと思います。

●**駒井**　まさにおっしゃるとおりで、そもそも何のために評価が必要で、誰のための評価なのかを考えないと、評価のあり方は決められないということだと思います。

しかし文系・理系を問わず、アウトリーチや実務的なところに重きを置く学問体系では、論文よりも何がしかのアクションを起こすことが重視される場面もあります。そのような定性的な部分をどう評価するのかを考えなければいけません。

今回、せっかく SPARC Japan という枠組みを頂いているので、ここではもう文系・理系を問わない方がいいのかもしれませんが、実務的な学問と基礎的な学問と両方あった場合に、特に実務的な方向の学問の評価をどのように学術情報の流通に乗せていくかということを考えないといけないと思っています。

今日はパネルメンバーとして千葉大学の竹内先生に来ていただいています。今、少しお話ししたことを、竹内先生にご解説いただけるのではないかと思います。導入の部分で、今までのお話をお聞きになって何かコメント等がございましたら、お願いします。

●**竹内**　今日のお話を伺っていて、研究評価をどのように行っていくかを考えた場合に、これは人文社会系に限らないと思うのですが、評価を行うための基盤をわれわれは本当に正しく持っているのかを考えなくてはいけないのではないかと思いました。

自然科学系の評価を考えても、よく大学で行われているのは、某社の特定の製品を使って評価するということです。それによって上位 1%論文、5%論文、10%論文という話で、何位になるのかというようなことを議論していくケースが非常に多いです。日本は STM の領域であれば、定性的な評価をした場合の結果の近似値というか、それにかなり近似する数量化はできているのだということを皆さん多くの場合了解しているので、あのような数値が生きているのだと感じています。

人文社会系の場合、それがどうなるかということを考えると、今から十数年前の論文ですが、人文社会系の研究の九十何パーセントは引用されないという話が出ています。引用をベースとした数量化は、その研究活動なりをほとんど正確には反映し得ないということがあると思います。

そう考えると時間とお金をかけて行う質的評価と類似した、多くの方が納得できる何らかの数値化指標をどのようにつくれるのかが非常に大きなポイントになるのではないかと、今日のお話をずっと聞きながら思っていました。

今日、私がここに来ているのは、「人社系の研究評価を中心に」はサブタイトルで、メーンタイトルは「学術情報のあり方」だからだと思います。では、この人文社会系も含む研究評価の前提としての学術情報のあり方とは一体何なのでしょうか。永崎さんが学術情報のエコシステムの問題を指摘してくださいましたが、その部分は非常に大きな問題をはらんでいると思います。駒井先生からもご指摘がありましたが、人文社会科学系であれ、自然科学系であれ、グローバルな競争を視野に入れて研究活動の評価を考えなければいけないのですが、特に人文社会科学系の場合は、競争していけるだけのしかるべきデータがつくられているか、あるいは利用可能になっているかという問題があります。

例えば、雑誌を評価のベースとして考えるとしても、日本語の雑誌はまだかなりの割合のものが電子化すらされていないという状況にあり、これはオープンアクセスのさらに前の段階だと思います。このような基本

的な部分を整備していくことが、多様な評価を可能にしていく一つの大きな基盤になるのではないかと思います。もちろん雑誌だけではなく、先ほど来、一つのキーワードとして出ているアウトリーチという活動を、学術情報のエコシステムや流通のプラットフォームの中で、どのような形で表現して、どのような形で共有化していけばいいのかということも大きな課題になっていくのではないかと考えます。

●**駒井**　まだあまり電子化も進んでいないという状況を打開して、評価の基盤をつくっていく必要があるというご指摘だったと思います。古典というか、文系のコアな部分をされている永崎さんから、今のことについてコメント等ありましたら、ぜひ。

●**永崎**　一つは、何はともあれ電子化しないことにはということです。日本だとまだ、「雑誌を買えばいいではないですか」「図書館に行けばいいではないですか」という話になるのですが、ここのところ、ヨーロッパやアメリカなど、日本に関心を持って教育研究体制を整えてくれているところから、「電子化していない書籍や雑誌の購入が難しいので何とかしてくれないか。このままでは日本研究を学部生たちに勧めるのが困難になる」という指摘が寄せられています。主に北米の日本研究担当のライブラリアンから強く寄せられています。実際、電子化して販売してもいいのですし、それで DOI を付けてもらってもいいので、取りあえず電子化はしてもらえるとありがたいです。

また、人文社会系の特に日本文化を扱う事柄について、英語で発表する、論文を書く、本を出すことが、乗り越えなければいけない壁なのか、あるいは乗り越えなくていい壁なのかというところが難しいです。

例えば今、文部科学省の大型プロジェクトの一つとして、「歴史的典籍に関する大型プロジェクト」という、88 億円を使って 10 年間で行うプロジェクトが始まっています。これは国文学研究資料館で進められつつあるのですが、このプロジェクトでは、日本の文学資料、日本語の古典籍を電子化して、それを国際的にも発信していこう、国際的な研究ネットワークを形成していこうとしています。そうすると、まず、用語が英語化できていません。もちろん海外で研究発表している人たちは自分流に英訳しているのですが、日本の多くの研究者が合意できるような定訳が、学術用語ですらまだ十分に整備されていないという状況があります。

私が主に取り組んでいる仏教学は国際化が早くて、むしろ英語で発表しないと、最終的にはうまく業績として認知されないような状況になっています。術語なども取りあえず英語にしてから考えるという状況になっていたりします。このように、人文系といっても分野によって全然違います。このようなことが私が直面している状況です。だからどうしたらいいのかは、また考えなければいけないところなのですが。

●**佐藤**　今の永崎先生のお話に関連して、アングロフォンという言葉もありますが、今、ドミナントなのは英語なので、英語に合わせるしかないと思います。僕はあと 2 年半で還暦ということで、自分の業績を総ざらいして調べてみたら、修士 2 年の時に英語で論文を書いていました。心理学を専攻していたのでこれは当たり前でした。

東北大学文学研究科の心理学の論文誌は「Tohoku Psychologica Folia」というラテン語のタイトルなのですが、戦前からあるのです。戦前はメジャーがドイツ語で、戦後のメジャーは英語になりました。これからどう変わるか分かりません。中国語になってしまうかもしれませんが、それはともかくとして、やはり日本語オンリーというのは非常にドメスティックです。

経済学はそのような教育を大学院教育から行っているので、なるべくユニバーサルな言語で考えます。そういう癖をつければ、定性的な、質的な、仏教、歴史学などでも、用語を統一して話し合うのはそんなに大変なことではないと考えるのは甘いでしょうか。

●**永崎**　例えば、日本文学について英語で論文を発表するようになった、最新の研究発表が英語で行われるようになったときに、日本人も英語が読めなければ、最新の日本文学の研究成果を読めないとなると、明治以来積み上げてきたものを一気に突き崩すような、大変なことになってしまうのではないかと思います。私がエコシステムの中で申し上げた、学術出版社が担ってくれていたキュレーションの仕組みも、英語で論文をいつもチェックできる編集者でないとできなくなってしまい、ハードルが一気に高くなってしまうのではないかと気になっています。

●**駒井**　この点に関して、中尾さんは何か言いたいことがあるのではないかと思ったのですが、いかがでしょう。

●**中尾**　両方やっては駄目ですか。僕はいつもそれを考えています。海外に行くと、僕たちでも日本のことを教えろと言われるので、日本のことを知りたい海外の人はかなりいると思います。英語で発表するのはやはり大事だと思いますし、同時に、日本の方々にも伝える義務があると思うので、それは日本語でやってしまってもいい。それを許容したら何の問題もないのではないかと思いますが、どうでしょうか。

●**永崎**　私も両方できたらいいなと思いますし、私はなるべく英語と日本語両方で発表しています。しかし、多くの人がやらないのは何か理由があるからだと思うのですが、中尾さんはどういうところに理由があると思われますか。

●**中尾**　分野によって違うと思います。ある分野では、間違いなく英語で書くことへの抵抗があります。そのような流れに乗りたくないという人もいますし、実際に英語で書けないという人もいると思うので、いろいろなタイプの抵抗があると思います。

他に、英語でやることに何の意味があるのかと、強い疑問を感じる人もいます。ある分野では、海外ではなく日本のことなのだから、そこに英語を当てはめることがおかしいと言う人もいます。答えになっているでしょうか。

●**駒井**　そうですね。本職にされている皆さんのご意見は分からないですが、例えば英語の定訳が決まらないというのは、英語にしてからブラッシュアップしていって、ネイティブとやりとりする中で、「これの方がフィットするかな」という形で決めていくべきではないかと思います。

例えば最近だと、妖怪の研究がすごく興味を持たれて、日本語がネイティブぐらいのアメリカ人が入り込んできて研究するような状況になっています。もう日本だからということで区切れない状況がそこまで来ていると思います。

その中で、人の評価ではなくて仕事の評価として、「これが面白い」「これはいい」というのは何とかしていかないといけないとは思っていて、そのためのプラットフォームをどのようにつくり込んでいくかという議論をした方がいいと思います。

「多様な評価」がキーワードだと思いますが、それを何がしかの評価のプラットフォームに載せるとなったときに、どういう形態があり得るのか。例えば、Facebook のように「いいね！」がいいのか。小学校のクラスで「友達の名前を書いてください」というのがありますが、ソシオメトリックというのですか。あのような感じで、「あなたの好きな論文を選んでください」と、どの論文とどの論文がつながっているのかを見るのがいいのか。いろいろなやり方があると思います。

アウトリーチにしても、そのアウトリーチがどういう活動と関連を持っているのか、何がしかの定量化することはできるかもしれませんし、いろいろなことができると思います。そのために電子化することがまず大事だと思います。

私自身は、評価を逃れるのは厳しい状況ではないか

と思っているので、その評価に乗せていく場合に、どのようなプラットフォームを考えれば現実的なのか、フィージブルなのかというご意見をぜひ頂ければと思います。難しい問題で、答えはないのかもしれません。100%正解をつくってから走らせるのが日本のやり方だと思いますが、それだとなかなか動かないと思うので、「こんなアイデアあるよね」ぐらいの軽い感じで走ってみて、それからシェイプアップしていくのがいいと思います。いかがですか。

●**フロア 1**　国立研究機関の研究者です。SPARC Japan の運営委員を仰せ付かっています。佐藤先生が言うところの現場で起きているという意味で、私がずっと注目しているのは環境学です。環境学は、政治、経済、サイエンス、エンジニアリングなど、いろいろなドメインを持った人が集まって、社会課題を解決し、サイエンスを解き、経済や社会にインパクトを与えようとしているので、さまざまな研究評価軸があると理解しています。特にソーシャルインパクトをどのように測ったらいいのかということで、環境系をずっと注目してきましたが、なかなか難しいなと感じています。

その上で、現場の野村さんに伺いたいのですが、環境学の分野で、教授の選考において、たくさんのドメインを持った人が集まってきたときに、どのように評価して選定していますか。今は分かりやすくするために教授と言いましたが、それに限らず、環境学の現場での研究評価はどうなっているかを伺いたいです。それが駒井先生も言っている問題提起の一つの縮図なのではないかと思ってお聞きしました。

●**野村**　私どもの環境学研究科は三つ専攻があって、第 1 専攻が理学系、第 2 専攻は工学系、第 3 専攻が社会科学系で、やはり教員・学生の研究業績が分野によって違ってきます。昇任も学位授与も、本質的にはお互いの分野の基準を尊重する形で行っているのではないかと思います。たまに、こういう業績で良いのかという議論にはなろうかと思いますが、最終的な結論は、その分野の専門家の判断にある程度任せることになっているように思います。

学位基準に関しては、うちは査読論文 2 本がドクターを出す条件になっているのですが、それはある程度理系基準に合わせています。もともと私のいる講座では査読誌に出す文化がなかったのですが、それをそのように合わせることにして、いろいろと工夫して対応しています。ある程度の環境整備とお互いに対する尊重で、あまりぎすぎすはしていないと思います。

●**フロア 2**　やることは一つしかないので、本文のオープンアクセスはまず諦めてしまいましょう。要するに、どのぐらいの論文が出ていて、どれぐらい使われているかを見たいので、人文社会系がそれについての基本的なデータを持っていない、特に日本語で発表されたものについて持っていないことが問題であるとすれば、その一覧表をつくればいいだけではないでしょうか。

日本には、人文系の大学教員は 20 万人しかいないのですから、皆さんから集める。もしそれについてこない分野があれば、そこは忘れられるだけの話なので気にすることはありません。やるところがやって、自分たちの論文はこれだけ、こんなものが出ていると示していただければ、それをどう評価するかはまた別の人たちが考えることだと思います。

例えば、経済や政治や法律では、日本語の商業出版社が出すところに書かれている方もいて、そういう方の社会的インパクトは大きいように感じる場合もありますが、そういうものの評価は、学術的なコンテクストの中で考えるのか、それとも資源配分の中で考えるのか。それはその段階で考えればいいことで、もともとのデータがないところで議論は始まりません。ともかく誰かが音頭を取って集めればいいのではないかと思います。

もともと NII の CiNii の「Ci」というのは、サイテーションの「Ci」のはずですから、本来はプラットフォームがあったはずなのですが、ほとんどその機能は

忘れられています。再構するのかしないのか分かりませんが、駄目でもやる気のある分野の人たちがやればいいだけの話ですから、すぐ始めればよいのではないかと思うのですが。

例えば永崎さんのところは当然やっていると思います。それに、昔は学術雑誌の中に今年出た論文の一覧表が載っていた分野もあります。電子的になって楽になったのに、なぜそのようなことをみんな躊躇しているのかよく分かりません。

●**永崎**　NII で引用文献を集めてくださるのをやっていましたよね。あれを拡充してくださればいいなと思っていたのですが。確かに人文系で当事者が引用情報を集めるというのは重要な方向性だと思います。実は、RU11（学術研究懇談会）で何かやってもらえないかと思って、そういうことをやりかけている人に話をしたことがあるのですが、そちらはそちらであまりうまく回っていないようです。このたびの NII-ELS から J-STAGE への大移行を何かうまく引用情報が集まるきっかけにできると、そちらの方は何とかならないのだろうかと思っているところです。ただ、それは本当に各学会任せ、分野任せになるので、あとはとにかく J-STAGE にデータが載るのを待っているだけという形になるのでしょうか。

●**フロア３**　CiNii をやっている大向と申します。引用については、過去経緯から考えて、確か NII を通って CJP という事業がありました。ただ、これが何のために必要だったのかというきちんとした議論が続かなかったのは大きな問題だと思っています。もちろん、論文のアクセシビリティーを確保するために引用情報があると便利だということについては、誰も文句は言わなかったのですが、その後、それを評価に使うという議論が起こった瞬間、ほぼまともな議論が行われなかったのは厳しい事実だと思っています。

あれは 1 件の引用を取るのに、NII が全部コストを払っていたという、壮大な事業ではあるので、それをどのような原資によって、なぜ文科省から来るお金の中でやらなければいけなかったかというきちんとした議論にどうしても結び付かなかったということは大きなポイントとして考えなければいけないと思います。

一方、ELS が今後終了し、J-STAGE を中心とした形になっていく中で、J-STAGE そのものには引用をメタデータとして載せる機能はあるので、ようやく自助努力においても、引用データをつくり、それをアボリッシュしていくプラットフォームが使える状況にまで来たということを評価しなければいけません。そして、評価されて生きていかなければいけない人たちがどう使いこなしていくかという議論につなげていければ、ポジティブな話になっていくのではないかと思います。

●**駒井**　まずは電子化というのには賛成で、載せていくプラットフォームをどこにするかということですが、今のは引用に関してだけの話ですよね。今は文系も理系もそうだと思うのですが、多様なアクティビティーに関していかに評価するかが極めて重要な問題として議論になっています。その辺に関してもやはり載せたいと思うのですが、何かアイデアはありますか。

●**フロア４**　NII の安達です。研究評価について分野によって違うというのは賛同するのですが、所内の管理職という、研究者および研究の評価をせざるを得ない立場にある身でずっと思ってきたのは、評価する立場から評価基準を出したら負けだということです。研究者は賢いですから、「論文の数で評価します」と言ったら、論文を書きます。「本で評価します」と言ったら一生懸命、本を書きます。「科研費を取れ」と言ったら、そのために書きます。

評価する側が心底正しい方向だと思っていれば、そういう評価基準を出せばいいのですが、うちぐらいの小さい組織では、もう少しぼやっとしたターゲットを設定しなければいけません。論文を書いても、全く引用されない論文がごまんとあるこの現実の中で、評価基準を明示して研究者をドライブするのは非常にリス

クが高いです。そういう意味で、評価基準を出すというのは、評価する側のポジションを外にさらすことになるので、厳しいことになると思います。

●**佐藤**　今、人事評価のことをおっしゃいましたが、何のための評価なのか、誰をハッピーにするのかという根っこのところを押さえていないと、どんどん技術的な小道に入り込んでデッドエンドになります。ここをこうやればできるということになってしまうのがとても怖いです。

また、今のはCiNiiなどの論文の話が中心になっていましたが、ご参考までにResearch Excellence Framework の場合に面白いなと思ったのは、unit of assessment の 34「Art and Design」と 35「Music, Drama, Dance and Performing Arts」です。こうなってくると、エグジビジョンやデザインも少ないパーセントですが入っています。論文だけではないのです。そういう多様な、評価対象も評価基準も、パネルであるから、ピアレビューであるから可能になります。もちろん技術的な、基本的なデータベースをつくることは大切だけれども、何のためのデータベースで、何に使うのか、誰がハッピーになるのかを考えないと、どんどん技術的なところにいって、私などは困ってしまうなという感じがします。

●**フロア５**　大学のメディアセンターの職員です。メディアセンターというのは図書館です。先ほど論文を「いいね！」で評価するという話があったのですが、それについて言えば、NII も後押しして、各大学の図書館を中心にリポジトリをつくっていて、各大学の紀要をそこに載せようとして頑張っています。単純に言えば、ダウンロード数はサーバーで取れるので、「いいね！」ぐらいのレベルであれば、近似としてダウンロード数は取れます。

僕も個人的には、アートの世界のものは紀要に載らないので、どちらにしても指標にはなり得ないと思っているのですが、それでも何がしかの評価をしなければいけないとなったときには、それは一つの目安、参考値ぐらいにはなると思います。ただ、サーバーでそれをきちんと出すような仕組みがなされているかどうかは、大学によってまちまちです。何にもならないけれどないよりはましだからやろうということであれば、例えばNII が今まで支援してきたわけですから、その中の一つのオプションとして、各大学にそういうことを考えてくださいと発信するだけで、割と簡単に実現できないことではないと思っています。

人文系の研究評価の中で、個人的には、文学系、歴史系、アート系の研究評価をどうするのかということに興味があります。英米文学、独文学、仏文学の先生が、作品の研究や著者の評価・研究を日本語で発表することは、個人的にはとてもナンセンスだと思っています。なぜ仏文の研究を日本語でやるのか、それはフランス語で書いて、フランス語で研究者たちと渡り合って初めて評価されるのではないかと思います。一方で、そのような多様性、フランス文学やドイツ文学の面白さを日本に紹介して日本国内で広めていく役割はあると思うので、一概に日本で論文を書くことが無駄かというと、そうではないと思います。

そういう二面性を持っているときに、その評価は一つの軸では絶対に無理で、多様性のことを考えるだけでも単純に評価はこうやっていけばいいというレベルではないし、考え過ぎてしまうと、結局、軸は決められないのですが、やっていくとなると、具体的に「こういうケースがあるけれど、こういうものはどうなるのか」ということも念頭に置きながらやっていく必要があるでしょう。

そういう意味では、社会科学系は理系とは違い、社会との関わりがある程度見えやすいという面でやっていきやすい部分が相当あると思っています。文科省が「人文系はいらない」と言っているときの人文系というものの念頭に何があるのかを考えて、「好きな作家の研究を勝手にやって勝手に論文を書いているだけだ」と言われたときに、「いや、そうではない」と言える評価の仕方を考えていく必要はとてもあると思ってい

ます。

●**駒井**　ありがとうございます。多様な評価基準が必要だということと、評価基準を言ってしまったら終わりというのももちろんよく分かります。言われたらそればかりに集中するというのも分かるのですが、例えば教育の場面だと、「この点数だけ取ったらAをあげる」とはならないですよね。ルーブリックをつくって、こういう評価や基準があって、これに関してこういうことをやったらこの点はこれと、多元的にやるのが普通になっていて、それはどんどんアップデートされていくはずのものです。

そういうものに倣って、いろいろな基準でいろいろな評価があって、それを総合的にこの領域ではこのように評価しますというやり方ができるといいのではないかと思っていて、それに手間暇かけるのは大変なので、できるだけ電子化してできればと思っています。

先生方から一言ずつお願いします。

●**佐藤**　評価というとわれわれが受けるだけのようですが、アメリカやイギリスに見てもらうだけではなくて、あちらの研究を評価したいと思っています。そのためにも、英語で打って出ていかないといけません。オックスフォードで半年お世話になって調査していたのですが、宮崎駿がどうしたこうしたなど、とんでもない日本論が世の中にあふれています。それでジャポニズムの権威になってしまう。悔しい思いをして質問をしたのですが、全然伝わっていませんでした。逆に、こちらから打って出て、彼らを評価して、「こんなアニメの研究は駄目だよ」「そんなものは全然、評価に値しないよ」ときっちりと教えてあげるためにも、もう少しわれわれは土俵を広げていくべきなのではないかと思います。

●**永崎**　例えば日本文化研究が海外で行われている場合は、比較文化研究や比較文学研究の文脈が導入されていたりするので、日本で行われている研究、日本の背景事情などをあまり勘案せずに、むしろそこから離れた形で研究することに意味があります。この話は、英文学、独文学、仏文学を日本で日本語で議論するのと全く鏡になっていて、やはり日本語で海外の文学作品の議論をきちんと行うことも、われわれの文化をいい方向に持っていくために必要なことではないかと思っています。そういう意味では、やはり日本語の研究発表もきちんと評価できるような枠組み、プラットフォームができたらと思います。

●**野村**　先ほど駒井さんがおっしゃった黒船的なインパクトは、恐らく人文社会科学では理系に比べると、良くも悪くもそれほど強くないように思います。ただ一方で、その正当性、必要性を示していくことは非常に重要だと思います。やはり多面的な評価が必要で、そのためには質的な評価をある程度やっていかなければなりません。

駒井さんがおっしゃったかと思いますが、質的評価をするための情報を提供するプラットフォームのようなものも必要なのではないかと思います。先ほど少々、researchmap の悪口を言ってしまったようなので、フォローも兼ねて申し上げますが、あれも個人研究者の質的評価に活用できるのではないでしょうか。例えば、フロアの方がおっしゃった、好きな作家の研究にどういう意義があるのかは、その業績だけ見てもよく分からない部分があります。しかし、（researchmap 内で）自分の研究の意義を書き加えられるようにしたり、こんなチャレンジングなプロジェクトをやっているという現状報告をしたり、（質的な側面を）何かしらビジブルな形にしていくこともできるのではないかと思いました。

●**中尾**　先ほどフロアの方が言われていたことは、データがないから評価のことを話しても仕方がないということかなと思って聞いていました。僕も有限の時間で行われたことだから数え上げられるはずだと思って数え上げようとしたら、すごい障壁にぶつかっていま

す。それがオープンアクセスになっていないこと、PDF になっていないこと、私の大学の本が非常に限られていることなどで、そのような現実的な問題が多々あるのです。その辺も、数え上げのためにある程度並行して検討していいのではないかと思っています。

●**中村**　今まで全く評価がなかったのかというとそういうわけではなく、コミュニティーの人々がどう見ているのかという意味での評価はあったのだと思います。現在の評価は特に資金配分に結び付いていますが、資金配分ではなくても、人文系であったら何らかの書く機会が与えられて、そういう機会が与えられる、配分されることを通しての、何らかの評価やガバナンスはあったのだと思います。

　ただ、その中で、資金配分や説明責任、透明性など新しいコンテクストが加わってきて、評価のあり方が変わってきて、あらためて今までどういう形で評価がされてきて、どういう形でクオリティーコントロールがされてきたのかということを検証することが必要だと今までの議論を通して感じました。

●**竹内**　人文社会系においても評価はきちんと行われてきたと思っています。事前の打ち合わせで、単にサイテーションの数だけ使って行う評価のことを「頭を使わない評価」と話していたのですが、むしろ人文系の方が頭を使う評価をきちんとやってきたのではないでしょうか。ただ、その部分がなかなか見える形になっていないことで、「人文社会科学系はひょっとしたらいいかげんなのではないか」という疑いをアカデミアの外の人たちに与えてきてしまった可能性があると思います。それについては真摯に反省すべきだと思います。その上で、きちんと行っている質的な評価の部分にきちんと近似している数量的な評価のような考え方ができないかは、考えてもいいと思っています。

●**駒井**　ありがとうございました。もうまとめないといけないのですが、まとまらない感じがまとまっているという結論です。評価する側もされる側も、やるべきこと、やれることはやっていって、より良い研究生活に結び付いていけばと考えています。今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。